



タイトル	仲良く自滅する中国と韓国 暴走と崩壊が停まらない！
著者	室谷克己 (むろたに かつみ) 宮崎正弘 (みやざき まさひろ)
出版社	徳間書店
発売日	2014年6月30日
ページ数	237 ページ

著者の室谷氏は「呆韓論」、「悪韓論」などで知られており、一方の宮崎氏は「世界から嫌われる中国と韓国」、「中国の時代は終わった」など中国ウォッチャーとして知られており、二人の豊富な知見で中韓の裏表を掘り下げておりその内容も興味津々である。

「世界から孤立しているにもかかわらず、その四面楚歌ぶりを認識できない中韓は、何時ものように“反日”に興じて国内矛盾をすり替えている。何時までも、そんなことをしていると仲良く自滅するしかないよ」と著者たちは警告する。

- ・ 中国と共に日本の集団的自衛権に反対する韓国の倒錯
- ・ 韓国に対し「朝貢関係に戻れ」と誘う中国
- ・ フェリー沈没後、韓国で人災事故が連続する理由
- ・ 中韓に共通する「詐欺」と「汚職」が横行する社会構造
- ・ 崩壊する中国経済にのめり込む韓国
- ・ 中国人が二度と行きたくない国は韓国
- ・ 韓国の「バリバリ文化」と労働地獄

などなど興味が尽きない。

目次を見よう。

はじめに	—— 自分で自分の首を絞める中国と韓国
第1章	抱きつき心中で崩壊する中国と韓国
第2章	中国・韓国「反日同盟」の本質
第3章	本当はお互いに軽蔑し合う中国人と韓国人
第4章	中国・韓国との闘いに打ち勝つ日本
おわりに	—— 日米×中韓に変化した東アジア情勢

面白かったところをいくつか覗いてみよう。

・でっち上げられる「抗日勝利」

韓国の場合、憲法からしてやはり嘘が書かれている。1919年の3・1国民運動で始まった独立運動が独立戦争に発展して、日本を破って自主独立を勝ち取ったという話になっている。韓国人のなかでは、3・1運動は、「フランス革命と比較しても遜色ない民族運動」と言うことになっているし、3月1日は「三一節」として、韓国3大祝日の1つにもなっている。しかも、運動の指導者だった二人の人物は、後に親日派に転向して朝鮮人から糾弾されたが、この事実は国民に一切知らされていない。それどころか、2人の名前は韓国の教科書にも出てこない。

独立戦争に関しても、デタラメばかりだ。3・1運動の翌年の1920年に、青山里戦闘という戦いが起こった。実際に抗日ゲリラと日本軍の戦闘というのはそれだけだが、韓国では、抗日ゲリラが勇猛に闘い、結果として日本軍は死者1600余名という壊滅的な打撃を受け、日本軍の斬死者の首を運んだ車が10台以上も続いたなどと言われている。

しかし、日本に残されている軍の行動記録などによると、この一連の戦闘での日本側の犠牲者は11人。靖国神社の合祀名簿にもそう記されている。抗日運動の成果をアピールするために、とんでもなく誇張した数字を捏造したわけだ。

抗日勝利をでっち挙げているのは、中国共産党とて同じである。共産党軍は1937年9月、山西省の平型関で日本軍に大勝利して、日本の精鋭を1万人殲滅したと言っている。調べてみると、精鋭部隊ではなく日本の荷駄隊（馬で荷物を運ぶ部隊）で実戦部隊ではない。谷間を通過しているところを待ち伏せして280人が死亡しているが、それを「勝った勝った、1万人殲滅」と誇張したわけである。さすがに、余りに事実と違うので、この数字は後に1万人から1/10の1000人に変更しており、北京の軍事博物館でそれを見ると、白い修正液で消して、1000人にきれいに直されているのが判るそうだ。

・「卑怯でも勝てばいい」という国民性

日本で横綱や大関になっているのはモンゴル出身者ばかりだ。一人だけ中国籍の外国人力士がいるが、調べてみるとモンゴル族だという。

漢族はなぜ相撲が出来ないかというところ、漢族は辛抱強く鍛え上げるというようなことは苦手だという。漢族の特徴は、どんな卑怯な手を使ってもいいから、横からパッと実をとる。あるいは、人の成果を盗むのが得意で、そこは韓国に非常に良く似ている。

スポーツの話でいえば、中国人は個人競技は得意だが、団体競技は苦手だ。つまり、「中国人は1人1人は優秀（中国人が自分自身をそう評価する）だが、三人寄ればブタになる」とよく言われる。中国の野球が強くないのは、チームプレーが出来ないからだ。

中国と韓国は本当によく似ている。孫氏の兵法がそうだから、手段を選ばず、勝つこと

が最終目標になっている。

#### ・寛容な日本社会とは相容れない中韓文化

中国や韓国とは異なり、日本は島国だ。大陸と日本の交流が盛んになって、遣隋使や遣唐使が派遣されたが、それでも 600 年から約 300 年間で 25 回くらいしか行っていない。菅原道真の進言によりこれらは 894 年に廃止されたが、それ以前の約 50 年間は一度も出していない。というのも、道真はもう学ぶものはないと考えたからだ。

むしろ、遣唐使よりも、遣日使の方が多くて、約 2000 人以上が日本に渡ってきている。このほとんどは帰国しなかった。遣隋使、遣唐使で大陸へ行った日本人は、ちゃんと帰っており、帰国の意思もあった。それにしても、文明の伝わり方が 1 世紀から 2 世紀も遅れていたにも拘らず、日本は、中国の「行儀の悪さ」、「マナーの悪さ」、「野蛮さ」という中国文化の影響を全く受けていない。すなわち、行儀作法はその国が持つ文化というわけだ。

#### ・「外華内貧」の国

朴槿恵が 2013 年訪中時に、習近平に、安重根（伊藤博文の暗殺者）記念館の次に、中国の重慶にある光復軍の施設を復元して欲しいと頼んだ。光復軍というのは、朝鮮から上海に逃げてきた独立運動派が立ち上げた大韓民国臨時政府の軍隊だが、日本軍と戦ったことすらない（というよりも、こんな歴史的事実はなく、韓国はこういう架空の軍隊が実在したと思っている）。しかも、光復軍は中国共産党の宿敵であった国民党の蒋介石のもとにいたにもかかわらず、これを共産党に復元してくれと頼む感覚にはさらに驚く。それを受けた中国共産党は、2014 年 3 月の日米韓三か国首脳会談を前にして行った中韓首脳会談で、習近平はわざわざ、「朴槿恵の希望通り、光復軍記念碑がもうすぐ竣工されます」と話したという。

もう中国も韓国も、歴史の連続性とか哲学とか、全くどうでもいいということだ。もっとも、中国は「歴史は勝者が書き換えるもの」と言っているが、勝者になったことがない韓国もそういう気質なのだろう。しかし、哲学的な基盤がないと、いつも勝手な論理をこねくり回すだけになってしまう。韓国にとって歴史とは、「こうあるべき歴史」であり、事実ではない。つまり、「ファンタジー史観」と言われる所以である。

韓国の教科書にはハングルを創出したとされる世宗大王が載っているが、このハングルは元朝がチベットの仏僧に作らせた「パスパ文字」という表音文字のパクリだろうと言われている。

韓国人が誇大妄想の「ウリナラ起源説」を唱える一方で、著者も一つくらい朝鮮起源説のものがあるだろうと探してみたがないという。チマチョゴリも、モンゴルなど北方遊牧民の「胡服」からの影響で出来たものだし、プルコギもモンゴル地方の料理がルーツという。キムチは、満州から白菜の漬物が伝わって、そこに日本から伝わった唐辛子を入れて、現在のキムチになったという。



2014年7月4日の中韓トップ会談は習近平の「北へのあてつけ」、「米韓の離間」、「反日共闘」を謳うはずだったが不発に終わっている。朴槿恵が韓国産キムチを中国に輸出するため、中国の衛生基準を変更するよう要請している。

韓国産キムチは中国人でさえびっくりするほど大腸菌が多く不衛生であるという。というのも、韓国人はトイレの後に手を洗う習慣がないからだ（この点に関しては、中国人も全く同じでトイレの後も手を洗う習慣がない）。

壊れて映らないけれども、大きなテレビを応接間に置く。本棚には文学全集が入っているが、箱の中は空っぽ。これが、外華内貧の民族性である。韓国といえば美容整形。それもこの外華内貧の民族性である。

#### ・公德心がない中国と韓国の愛国者

中国で反日暴動の際、日本の製品や商店を破壊することを政府が正当化するために、「愛国無罪」というスローガンをういたが、破壊されたのは当の中国人が所有する日本車や日本食レストランだった。反日デモに参加した中国人が、自分の車に乗って帰ろうとしたら、日本車だったので破壊されて愕然とした、などということもあった。

そうした中国の愛国者たちも、日本に来ると、ほとんどが秋葉原に行って、「電気製品」、「森永の粉ミルク」、そして「日本の薬」を買って帰るといふ。愛国者でも、国内産業を育成しようという発想はない。

韓国の粉ミルクも、しょっちゅう問題が起こっている。いわゆる異物混入が多い。それでも、中国のように死ぬことはない。

中国では結構死んでおり、石灰を入れたりして問題になるほどデタラメで、作っている方も愛国と言いながら、儲けしか考えておらず、「客の安全などどうでもいい」と考えているようだ。

アメリカでは、2007年以降、中国産の材料で製造したペットフードを食べた犬や猫など3万匹に異常が起こり、うち600匹以上が奇病で死ぬという騒動が起きて大問題になっており、今でもメーカーの自主回収騒ぎになっているという。

韓国では、天然塩が問題になっている。これは塩田方式の商品で、日本では高級品として売られている。しかし、製造過程で塩田に雑草が生えるのを防ぐために農薬を使っているという。



韓国海苔にも農薬問題がある。また、韓国ではゴミも糞尿も海に垂れ流すことから、人糞が海苔に付着したり、ノロウイルス発生源で有名である。韓国製の海苔が日本で良く見かけるようになったが、中国の食品と同じレベルで、とても食べられるとは思われない。日本政府は国際的に韓国を非難すべきだ。韓国の衛生や環境に対する考え方は異常である。彼らの異常な行動はそれだけにとどまらず、日本海に大量のゴミを垂れ流し、日本海沿岸を汚している。太平洋岸の人達は、日本海側に来た時に

海岸に出てハングルゴミの多さに驚くはずである。日本海側に漂着する大量のハングルゴミは、外国である日本にまで迷惑をかけることを韓国は知るべきである。

本書を読み終えてつくづく感じたことは、韓国や北朝鮮が世界史の主役であったことなど一度もなく、常に中国、日本、ロシア、アメリカに動かされてただけで、世界中の誰からも相手にされず、単なるアジアの一地方に過ぎなかったということである。しかも、中国史の一部でしかなかったということが良く理解できた。

中国はといえば、国内の止まぬことを知らない格差拡大、経済成長の鈍化、影の銀行をめぐるリスク、くすぶる民族問題、劣悪化した環境汚染など切迫した課題が山積みだ。

また、中国は、国家と社会に対して負うべき、「責任」と「義務」が判っていない。さらに、国際社会に対して負うべき「責任」はなおさらである。彼らが受けた「教育」或いは「メディアの宣伝」はほとんどが「憎しみ」と「他人または他国を歪曲した内容」で、中国人の「理性」と「公正な判断力」を失わせている。

また、全国民が崇拜するのは「権力と金」のみだ。利己的で愛国心もなく、同情心まで失った国家など国際社会の「尊重」と「信頼」を得られるはずがない。

中国の人民は過去の「権力の奴隷」から、今は「金銭の奴隷」に変わっただけだ。このような政権が人民の尊重と信頼を得られるわけがない。

大多数の中国人は「尊厳のある生活」とは何か全くわかっていない。民衆にとっては「権力と金銭の獲得」が生活の全てであって、それが成功なのだ。全民腐敗、墮落といった現象は人類の歴史上でも空前絶後である。

また、憚ることのない「環境破壊」と「資源の略奪」、「贅沢と浪費の生活方式」は地球が何個あれば供給できるというのだろうか？ 他国が危惧するのも当然だ。

中国政府はいつも民衆の注意力を他国にそらし、外に敵を造り、自分の圧力を外部に転嫁させようとするが、時代の流れと人類文明の趨勢に従い、自ら変革を起こし、民生に関心を払い、民主を重視し、無責任な抑圧をやめるべきだ。

そうでないと、現状のまま推移すれば、中国はますます不安定になり、将来大きい社会動乱と人道災難が出現し、数年後には、中国は世界で最も貧しい国になるだろう。

今の日本には、中韓の問題の他にも、日本国内で「侵略史観」に染まった反日政治家やマスコミが多すぎることだ。「憲法解釈の変更で集団的自衛権を認めるのはおかしい」などと大騒ぎしているが、集団的自衛権などという概念は国際政治の中にはない。集団的自衛権は国際常識だから世界から見れば、日本は何でこんなことを口角泡を飛ばしながら議論するのか不思議がっている。ところで、韓国も何故か日本の集団的自衛権の行使に反対している。朝鮮有事の際に日本も米軍と韓国軍の支援が出来ることになるというのに変な話だ。

何だかんだと言っても、日本と韓国、そして中国との関係を悪くしている要因の一つは、日本の反日日本人たちだ。最近では、村山富一や鳩山由紀夫のように、元首相が韓国や中国に行って日本の悪口を言っている。何とも情けない話だ。

ドイツの「フランクフルト・アルゲマイナー紙」は、南シナ海や東シナ海での中国の覇権行為に関して、「協調性に欠ける中国が同地域で『陶器店に迷い込んだ象』のように振る舞っていることは否定しようがない」、「近隣諸国に対して、かつての帝国主義国のように行動している」と断定している。朝日、毎日、東京、中日などは、このような冷徹なものを見方をするドイツ紙の爪の垢でも煎じて飲んで欲しいものだ。

世界の論調は総じて中国の軍事費が10年間で4倍に達するという異常事態の中で、日本が抑止力を強化することは無理からぬことであり、そのための集団的自衛権の行使限定容認は当然のことと受け止めている。

さて、中国の上海海事法院が商船三井の貨物船を差し押さえた。戦前の貸貸を巡る訴訟の判決が言い分らしい。とっくに解決している問題（中国は1972年の日中共同声明で戦争賠償請求権の放棄を表明した）をネタにした強盗脅迫事件である。

中国は長年、経済成長を遂げてきたと言われてきた。およそ法治国家とはいいがたい国がどうして経済成長が出来たのだろうか？

そのからくりを明かせば、日本を含む先進諸国の投資による「疑似経済成長」である。すなわち、外国企業が中国共産党の保護のもと、工場を建設し、生産して、外国に輸出して、利益を中国共産党幹部と折半するという、とても国民経済が生育しているとは言えない実態であった。

この状況下では、外国企業は中国共産党にとって金を持ってきてくれる有り難い顧客で、保護しなければならない対象だった。その上客の資産を言い掛かりをつけて差し押さえてしまうとは、例えて言うならば、スーパーの従業員が、客に「おまえ、万引きしただろう」と言い掛かりを付けて金品を強奪したようなものだ。

もし日本なら、従業員は直ちに解雇された上警察に逮捕され、スーパーの店長は謝罪の記者会見となる。ところが中国ではそうはいかない。というのも、スーパーの店長が強盗の親分で、しかも警察署長も兼ねていると言う例は珍しくないからである。こんなスーパーは客が寄り付かなくなるから店は潰れる。中国経済も全く同じことで、外国企業は中国共産党の背信行為を目のあたりにして投資を手控える方向に動く。

中国は完全な行き詰まりの中で、もはや近代国家を擬装することさえ出来なくなり、強盗国家の本性を露わにした。

中国は、「中国人民である共産党員、太子党、富裕層」が、同じ中国人民から容赦ない搾取を行う、現代版植民地国家なのである。

2014. 7. 7